



海城高等学校企画の第1回「カナダ短期留学」が無事終了しました。

1月9日に出発し、3月19日に帰国するという、約70日間のカナダ留学です。留学中はホームステイをしながら、現地の公立高校に通学します。

この企画は高校1年生と2年生を対象とし、3～5名を募集していますが、第1回は高校1年生5名が参加しました。(高校1年生8名の応募がありました)第2回の案内は5月初旬にお届けします。

参加生徒のレポートを何回かに分けて掲載します。今年度も多くの生徒の応募を期待しています。



羽田空港で出発を待つ5名

## ☆ 佐藤 有造

まず、僕が今回の留学を志望した理由は、英語を勉強するのではなく、使ってみたかったからです。日本にいるときは、英語を勉強することは十分にできます。ところが日本では、英語を使う機会は学校で勉強したとき、塾に行ったとき、自分で意識的に勉強しようとしたときに限られ、英語を日常生活のなかでコミュニケーションの手段として使う機会はほとんどありません。しかし英語も日本語と同じように、言語です。ですから本来は、僕たちが日本語を日常的に使うように、英語も普段の生活のなかで使われているものです。僕は英語でコミュニケーションをとることがその本来の目的で、英語を勉強する上での醍醐味だと考えています。そしてカナダ留学はとてもよい機会だと思ったので、志望しました。

今回の留学の感想から申しますと、本当に行ってよかったと思えるものになりました。もちろんこの留学を志望した目的である、日常生活全般において英語を使ってコミュニケーションをとることについては、十分にそれをすることができて、とても満足いく結果になりました。

僕がホストファミリーと最初に会ったときのことは今でも覚えています。僕はホストファミリーが自分のことを歓迎してくれるのか心配していましたが、僕がホストファミリーの家に着くと僕はすぐに食卓に案内されて、ホストファーザーのHarveyはそこでさいころを使うゲームをして見せてくれました。そしてHarveyは僕もそのゲームをやってみようと言いました。僕はすぐには何が起きているのかわからず、戸惑いましたが、すぐにHarveyとホストマザーのBonnieと打ち解けることができたので安心しました。

HarveyとBonnieは一緒にいるととても楽しい人たちで、その後のホームステイの期間中、二人は僕をいろんなところへ連れて行ってくれました。二人の友達の家や娘さん夫婦の家、トロントやナイアガラの滝、スキー、スノーチュービング、カーリング、アイスホッケーの観戦、博物館、メイプルブッシュ(砂糖楓の林)、レストランなど。毎週日曜日には教会に連れて行ってもらいました。家にいるときは、テレビ番組や映画を見たり、一緒にカードゲームをしたりなど、非常に充実した毎日でした。

HarveyとBonnieは今までに留学生を30人以上受け入れてきたそうです。そのためか、二人は英語をゆっくり、はっきりと話してくれたのでとても助かりました。そのおかげで、二人とは初日から問題なく英

語で話せ、途中からは自分が英語で話しているということ意識することがほとんどありませんでした。二人と話すのはとても楽しく、やりがいがありました。特に自分の思いを英語で表現でき、それが相手に伝わって話が盛り上がったときなどはたまらなく面白かったです。

学校はカナダに到着した日の三日後に初めて行きました。本当は着いた翌日から行く予定でしたが、大雪のために二日間連続で休校になりました。僕が到着した日は時差の関係もあって28時間くらい起きていて、寝たのも午後10時だったので助かりました。

学校では初めにガイダンスの先生を紹介され、校則などの説明を受けました。そして受講する科目を選びました。僕が一番日本とカナダが違うと感じたのは学校です。日本では全ての生徒が同じカリキュラムをこなしますが、カナダではいくつもある教科の中から受ける教科を自由に選べます。さらに、驚いたことにカナダでは一学期ごとに四教科しかありません。つまり、一日に受ける教科が四つしかなく、それを毎日繰り返すのです。しかも受ける教科もまったく自由なので、全て実技系の科目を選ぶなどということもできます。ところで僕が選んだ教科は一時間目から順に、第一学期(9月から1月まで)では、技術、美術、英語、地学を、第二学期(2月から6月まで)では、技術、哲学、化学、料理です。僕が体験したのは、第一学期を2週間、第二学期を6週間くらいです。

技術では、長さ約三メートル、幅約二十五センチメートル、厚さ約三センチメートルの杉の木材を加工して、さまざまなものを作ります。技術室には人より大きい電動の機械が何種類もあり、それを使って木材を加工します。日本の技術と比べるとかなり本格的です。このクラスは高校生のうちからしっかりと技術を身に付けた職人を育てるためにあるそうです。僕はこのクラスでメモリーボックスを作りました。

美術の授業では、自分のイニシャルをデザインしました。海城の美術ではやる機会のなかった水彩画をやることができ面白かったです。

英語では、“An Absolutely True Diary Of A Part Time Indian”という本を読みました。これは先住民がテーマの小説です。カナダには先住民の保護区があり、学校では先住民についての授業もあります。英語の授業では板書はなく、先生が本を読み、その後に読書クイズをやるといった流れです。

地学では、気候について習いました。内容は海城の中学三年生のときにやったことに似ていましたが、英語だったのでやりがいがありました。授業の形式は、板書を取り、その後にプリントの問題を解くというものでした。

哲学は僕がカナダで取った授業のなかで最も難しかったです。内容は、「トローリーの問題」やプラトンの「洞窟の比喩」など、現代社会でおなじみのものでしたが、授業の最後にジャーナル(先生の設問に対する自分の意見)を書かなければならず、抽象的なお題のときはかなり悩みました。

化学では、原子について習いました。授業の形式は地学と同じで、この二つの科目が日本の授業に最も近かったです。

料理は一応は四時間目ということになっていましたが、実際は昼休みの時間に行われました。昼休みに食堂でピザなどを作り、それを学校の生徒に販売するのが主な内容です。この授業は昼休みに実施されるため、その代わりに四時間目は自由時間でした。

学校での一日は国歌斉唱から始まります。そして一時間目(8:00~9:20)、二時間目(9:30~10:45)、昼休み(10:45~11:40)、三時間目(11:40~12:55)、四時間目(13:05~14:20)といった流れです。カナダの学校では各授業の教室が決まっているため、先生ではなく生徒が教室を移動します。そのためホームルームはなく、一緒になる生徒も毎授業ごとに違います。



カナダで一番苦労したことは友達を作ることです。これを説明するのは難しいですが、何というか、最初はどうしたらよいのかまったくわかりませんでした。カナダでは毎日が移動授業なので、それぞれの教室に自分の席が決められていません。どの席に座るかは自由です。しかし他の生徒がどこに座るかは毎回同じなので、自分が初日に選んだ席の隣には誰もいないということもありました。近くに生徒がいたときも大変でした。まず、何と話しかけたらよいかわかりません。それを考えるだけでもかなりの時間がかかりました。そしてようやく話しかけても、あるいは話しかけられたとしても、あまり話が續かないことが何度もあり、かなり苦労しました。また、ホストファミリーやそのほかの大人たちと話したときとは対照的に、生徒たちの話は聞き取りづらいものが多く、初めの頃は度々聞き返すこともありました。

ですがそんななかでも僕によく話しかけてくれた生徒が何人かいました。彼らはそれぞれ別のクラスでのクラスメートでしたが、彼らはみんな共通して日本に興味があるようで、僕はよく日本についての質問を受けました。これは今思っていることですが、留学に行く前にもう少し自分の国について知っておいたほうが良いと思います。ともかく困っていた僕に話しかけてくれる人がいてうれしく思いました。

僕だってただ話しかけられるのを待っていただけではありません。自分からもいろいろな生徒に話しかけなければとは思っていました。しかしそうは思ったものの、どうしたらよいかわかりません。やはり留学とはこのようなものなのかなと思いつつもあきらめられずに、何日も過ぎていきました。そんななか、僕はあつことを思うようになりました。それは、「自分から何かをやらなければ何も変わらない」ということです。自ら行動しなければならぬのです。そのようなことは最初からわかっていました。ですから面接のときには自分が積極的であると、積極的にアピールしました。ですがここにきてそのことをあらためて実感しました。

そのように感じた僕は、せつかくの留学なのだから後悔のないものにしなければと思い、勇気を出して少しずつ努力していきました。まずは挨拶から、そして笑顔で。相手とコミュニケーションをとりたいという態度を見せる。毎日話題も考えました。そうしているうちに、話せる相手も増えていき、最初に話しかけてくれた生徒たちの友達とも友達になれました。そのおかげで学校生活の最後のほうはコミュニケーションを楽しむ余裕もでき、充実したものでした。そして最後から二日目には、もっとも親しくしていた友達が家に招いてくれ、非常に感激しました。

残念ながら今回の留学は二ヵ月半で帰らなければなりませんでしたが、僕としてはもっと長くいたいという気持ちです。しかしそれでも留学の二ヵ月半という期間は大変貴重な体験だと思います。そのおかげで英語を思う存分に使うことができ、自分の英語、そして自分自身にも自信を持つことができました。今回の留学に参加することができて、とてもよかったと思っています。

最後になりますが、この留学を支えてくれた全ての皆様、本当にありがとうございました。

#### ☆ 養毛 貴士

まず、はじめに私が留学に行った、動機を書きたいと思う。

動機は大きく分けて、二つある。

一つ目は、英語力を向上させるためだ。無論、日本にいても、読み書きは十分に習得することができるかもしれない。ただ、聞いたり、話したりといったスキルは、日本での勉強だけでは十分に習得することが、出来ないと思ったのである。

二つ目は、異文化を体感することだ。文化の違いは言語に起因する部分が多いと思う。文化や慣習の違いを言語の観点から説明できないか、大袈裟に言えば、そういうことである。

次に、留学中の体験について、印象深いものを、いくつか選んで、述べていきたい。

トロント空港からシャトルバスで、約二時間。ホスト宅に到着したのは、現地時間21時位だったと記憶している。幾分か緊張もあり、吠える犬に辟易しながら、案内されるまま二階に上がると、そこは、まるまる自分の部屋。意外な広さに驚く。慌ただしく部屋の使い方について、一通りレクチャーを受けた後、同居することになる、同じく留学生でフランス人のP君とご対面。大人びていて再び驚く。同い年のはずなのだが。その後、翌日の学校についてホストマザーから説明をしてくれるが、よく理解できない。彼女も事情を察したようで、筆談を始めるが、筆記体でより分からない。

最初はそんな調子で、苦労したが（ホストマザーはおそらくもっとずっと）、次第に時がたつにつれ、段々と会話が成立するようになっていった。

朝食はシリアルか、それに加えトーストやベーグル。日本では毎朝、米を食してきた自分からすれば、シリアルなど霞を食っているがごとく、食べている感覚がしなかったものだが、そのうち慣れた。まあ、運動もロクにしなかったのも、特に問題はなし。でも、よく考えたら日本でもほとんど運動してないわ。

学校生活はというと、当然、授業は英語なわけで、はじめはちんぷんかんぷん。それでも何とかなってしまうのが、恐ろしいところで、自分でSOSを示さないと、問題視さえされないのである。

帰りに教室でホストマザーの帰りを待っていると、フィリピン人の留学生が話しかけてくれた。どうやら、日本のことに興味があるらしく、それで話しかけてきたみたい。向こうもネイティブスピーカーではないわけで、会話は、現地生以上に大変だったが、とても良い文化交流になったと思う。実をいうと、彼は2016年の秋ごろにフィリピンから越してきた、現地生で、帰国間際になって気付いたことだ。彼は帰国直前に手紙と書類？をくれた。まだ、開封していない。代わりに、自分は色紙に筆で、「文明とは優雅なる諦観である」と書いて、彼に渡したのだが、いい訳語が思いつかなかった。出典先の原著は英語だったかもしれない。

ちなみにホスト宅には「生きた人で一番、笑い声を聞いた耳でありたい」と書いた紙を残した。ご存知、松本人志の名言である。これもまた、いい訳語が思い浮かばなかった。これからの課題である。

#### 英語特別講習のお知らせ

昨年度までの「英語特別講習」は、今年度はリニューアルして実施します。大きな変更点は、「英語力維持・向上コース」と「海外留学・進学コース」に分けたという所です。また有料になります。講師はヴィアン先生から代わります。詳細についてはクラス掲示（中学2年～高校3年。中1は二学期から）をしますので、よく確認して期日までに申し込みをしてください。

なお、ヴィアン先生は「留学・海外進学カウンセラー」として、月に二度ほど出勤することになります。ヴィアン先生に相談したい場合は、グローバル教育部を訪ねてください。

##### ◇中2、中3英語特別講習

月曜 3時25分～4時25分 英検準2級程度の英語力を持っていること。

##### ◇高校英語特別講習

水曜 3時45分～4時45分

金曜 3時25分～4時25分

※料金は1,500円

TOEFL のスコアアップ  
ESSAY のトレーニング  
水曜と金曜は同内容